第Ⅳ部門　　芦屋らしい景観の空間分析

立命館大学理工学部土木工学科　正会員　　笹谷　康之
大日コンサルタント株式会社　学生会員　○神田　幹生

1．研究の目的

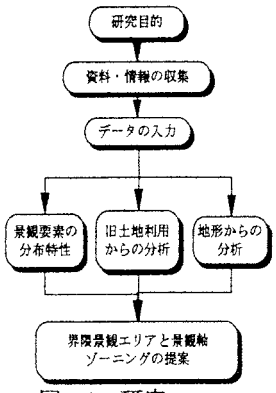
芦屋市内には和館・洋館だけでなく、かっての村落であった頃の社寺、史跡などが数多く存在している。これらの歴史や伝統を伝える史跡、建築物などは、都市の歴史的進展の中でつくられ、現代に残されたもので、地域景観の核となり地域の個性を表現するものである。しかし、今回の阪神大震災でこれらの核となる景観要素のいくつかは壊滅的な被害を受け、このまま放置すれば、芦屋らしさが失われ、特徴のない市街地になる。そこで、地区の景観的特徴を保全する復興計画が必要である。そこで、本研究では、芦屋市を対象にＧＩＳを用いて景観要素の分布と配置を空間分析して、芦屋らしさを特徴づける界隈景観と景観軸を抽出し、景観整備のためのゾーニングを提案することにある。

2．研究の方法

芦屋の景観要素として、和館、洋館、社寺、史跡、景観ポイント[1]、景観スポット[2]、眺望地点をとりあげ、これらをＧＩＳを用いて各種分析を行い、芦屋らしさを特徴づける界隈景観と景観軸を抽出する。

1）芦屋ならではの表情をもったところ。具体的には石垣・松並木・地道など。

2）近年になって景観に気づかって建てられた商業建築やマンション。



図－1　研究フロー

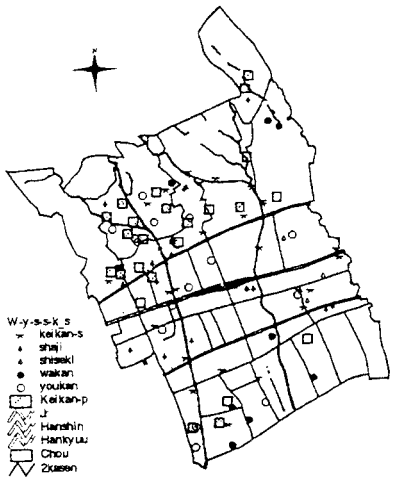
3．各種分析の結果

①芦屋の景観要素の分布特性

図－2に景観要素の分布を示す。景観ポイントは、圧倒的に山麓斜面に分布していることがわかる。この地域には集落が存在していたため、景観ポイントとなりうるような農村時代から続く旧家、用水路、和館の門構えと板塀、高い石垣・地道などが多いためである。景観スポットは、芦屋川・宮川に沿って多くが分布している。特に宮川沿いに多く分布しており、宮川周辺景観の向上を意識して建てられたことがうかがえる。和館・洋館・社寺・史跡に分布については②で述べるが、旧集落の存在位置に深く関与している。

②旧土地利用からみた景観要素の分布

旧集落から100mおきにバッファリングを行い、図－3を求めた。これから「旧集落の内部及びその付近に社寺、史跡があり、それらを囲んで200m位の範囲に和館が分布し、集落境から100m～400m位に洋館が分布する。」という傾向が明らかになった。そこで、このパターンに当てはまる半径400mの地域、これに準ずる地域を界隈性が強いと考え、景観ゾーニングの際の基本とした。

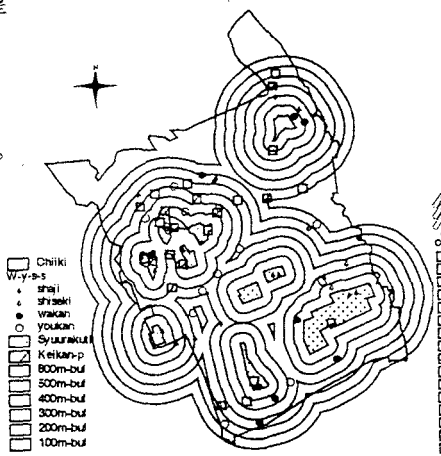


図－2　景観要素の分布

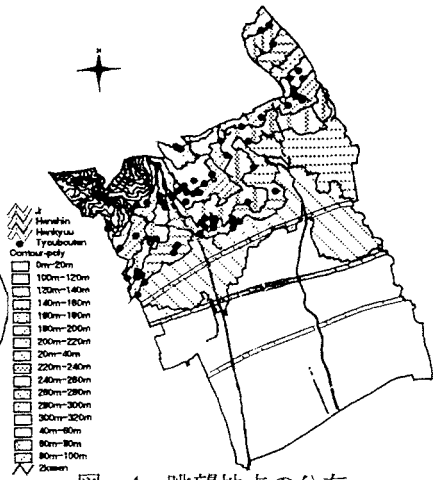
Yasuyuki Sasatani　Mikio Kanda

③地形からみた眺望地点の分布

図ー4に等高線と眺望地点を重ね合わせた図を示す。これから眺望地点になりうるには、40m以上の標高とおよそ13.5°程度の傾斜を有した地が良好であることがわかる。



図ー3　旧集落と景観要素



図ー4　眺望地点の分布

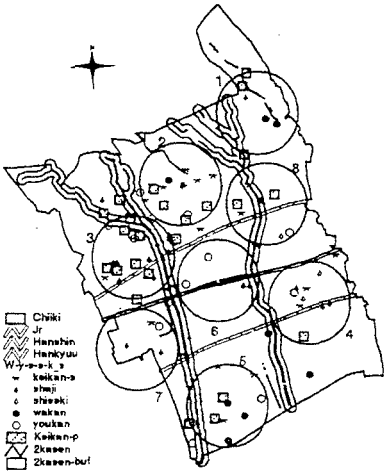
4．芦屋の都市景観の構造

以上の結果を総合化して、既存の景観的特徴が顕著なエリアと軸、景観的特徴を強化すべきエリアの軸として、図ー5を求めた。

エリア1～5……山麓、旧芦屋浜、打出の集落を核とし景観要素が集積しており、阪神間の良好な住宅地として特徴のあるエリア。各エリア毎に，従来からの特徴を保全する復興を進める必要がある。

エリア６、７……景観要素の集積が比較的少なく景観的特徴があまり見いだせないエリア。他のエリアとの連携の中で、住宅都市として必ずしも高層化しない特徴的な都心としての整備が望まれる。

エリア８……新しい景観要素である景観スポットが集積しているエリア。小規模でもハイセンスな商業の集積が見られ、この趨勢をいかした景観整備が望まれる。



図ー5　界隈景観エリアと景観軸

２河川の景観軸…芦屋川は各種の景観要素が集積する軸、宮川上流は主に景観スポットが集まる軸であった。この景観軸は、芦屋川は天井川的に凸型の横断面、宮川は堀割的に凹型の横断面をなしており、地形景観の骨格軸として、各エリアをつなぐ整備が望まれる。

5．まとめ

今回の研究により、芦屋市において８つの界隈性の強い景観エリアと２つの景観軸を抽出することができた。今後、芦屋らしい景観の指標の種類・サンプル数を増やすことで、芦屋らしさを顕著に表した景観ゾーニングができると考えられる。

【参考資料】芦屋の景観を考える会（1993）：「〈芦屋の景観〉シリーズ１　芦屋の景観資源」